

脊髄損傷者の障害することの意味を問い直す : 現象学的視点から

著者	鈴木 ひとみ
発行年	2007-03-26
URL	http://hdl.handle.net/10422/409

氏 名 (本籍)	鈴 木 ひ と み (京都府)
学 位 の 種 類	修 士 (看護学)
学 位 記 番 号	修 士 第 7 6 号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文題目	脊髄損傷者の障害することの意味を問い直す —現象学的視点から—

論文 内 容 要 旨

※整理番号	78	(ふりがな) 氏 名	すずき ひとみ 鈴木 ひとみ
修士論文題目	脊髄損傷者の障害することの意味を問い直す —現象学的視点から—		
<p>研究目的</p> <p>社会復帰後の脊髄損傷者にとって、個人的経験としての「障害」にどのような意味があるのかを明らかにする。また、その意味解釈をもとに、これまでの障害受容論を問い直す</p> <p>研究方法</p> <p>事故により突然障害を負い、社会で生活している脊髄損傷者 3 名に半構成的面接を行い、その内容を現象学的研究方法により分析した。</p> <p>結果</p> <p>突然障害を負った脊髄損傷者は、社会での生活を送ることによって＜新しい自分を発見しそれを意識の元に現前させ＞ながら、＜これまでのイメージの中の身体像から現実の身体へと折り合っていく＞。それは＜現在の自分を認め、共に歩んでくれる人々と出会う＞中で＜自分の持つこれからの可能性や未来に気付いていく＞、＜障害を引き受けるための新しい身体図式を知覚する経験を繰り返す＞ことそのものである、という 5 つの鍵概念を含む Structure が導かれた。</p> <p>考察</p> <p>結果で得た鍵概念を用いて障害受容論を問い直した。そして以下の 5 つの結論を導いた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 障害を負うことによる自己の身体への違和感は、今までの日常生活に慣れた身体の意味変容が迫られる体験として繰り返される。そのため、ステージ理論が示す、段階的にある境地へ辿り着くという解釈ではこの経験を十分説明できない。 2) 「受容」や全く新しく生まれ変わって「価値を変換」したのではなく、今の自分に慣れていくというような状況に「適応」している脊髄損傷者の意味世界があった。これを「折り合う」と表現し、以前あった身体像との間で揺れながらも現実的身体を生き、自己の意味が見出せる。 3) 改めて自己の身体を意味付けるのを助ける存在として、対等な人間関係である新しい仲間やパートナーなどに会うことが重要となる。 4) 身体の新し意味は、環境への適応と参加という未来につながり、それが自己の可能性への気づきとなる。これは価値変換ではなく以前の価値を基礎とした創造である。 5) 内的自己の身体像の作り替えが一生涯続き、真の自己の姿に出会っては折り合うという経験が繰り返されることが、障害とともに生きる姿である。 <p>そして看護者の役割を検討した結果、まず 1 つは、これまでの“障害を受容させよう”とする援助の方向性を反省し、自己との共存を試みようとする脊髄損傷者のありのままの姿を引き受ける存在になることである。次に、彼らが新しい身体像を改めて見出す過程で、適切な環境整備と場の調整を行う。それには一部の看護師が持つ経験知を広く共有し、それを評価および改善することが重要である。また、当事者間の交流を促進するプログラムのシステム化と相互利用できる環境を作り、コーディネーターとなる。さらに、障害を負った当事者たちが生活の中で身につけた、多くの経験と貴重な能力を明らかにし、それをリソースとして提供できるシステムの構築を行う。</p> <p>総括</p> <p>これまでの障害受容論に見られる段階的な受容への到達ではなく、彼らは逃れようのない現実の只中で新しい身体像と折り合う経験を繰り返していた。その姿をありのままに捉えて、障害を負っても存在する身体の可能性を引き出し、彼らと共に歩む存在としての看護者の役割を提言する。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。